



道端にうすくまってコケを観察する「コケガール」



地域のネイチャーガイドを対象に研修も実施



十和田湖ではカヌーなどのアクティビティも



奥入瀬溪流の魅力と価値を体感して学ぶ 地元のNPO法人が「コケを愛でるツアー」実施



人気を集める「コケを愛でるツアー」



2014年8月には日本蘚苔類学会の第43回大会も開催

「日本の貴重なコケの森」に認定された奥入瀬溪流

溪流沿いに歩きながら流れや滝を眺めて涼をとったり、色鮮やかな紅葉を愛でたりという「奥入瀬溪流」の楽しみ方に、今、新しいモデルが登場し注目を集めています。物見遊山的に奥入瀬を楽しむだけでなく、その魅力と価値を体感して学ぶ観光モデルは、文字通り、地域固有の資源を足元から見つめ直すことが発想の原点となりました。

天然の苔庭が連続して続く奥入瀬溪流

NPO法人奥入瀬自然観光資源研究会では、約300種類以上のコケが生息していることが明らかになった奥入瀬溪流で、「コケさんぽデビュー」じつくり楽しむコケの森、「コケさんぽライト」コケガールと行く！気軽に愉しむコケの森」などコケを愛でるツアーを実施しています。奥入瀬溪流は、天然の苔庭のように大きな群落を連続して見ることができ、優れた景観が、最大の特徴であると同時に見どころです。

同研究会の川村祐二事務局長は、「明治の文人・大町桂月が十和田湖や奥入瀬溪流を世に広め、地域に人が来るようになったが、どう受け入れたら良いかが分からず、料理や酒を用意したもの、その後も旧態依然とした物見遊山の観光スタイルから抜

け出せずにいた」と奥入瀬観光の歴史を反省し、「地域が持つ自然や歴史、民俗、文化など固有の『資源』を活用し、地域環境の保全を前提とした持続的な観光振興を目指す必要がある」と強調しています。

自然本来の豊かさを楽しむ旅行への転換

同研究会の設立にいたる経緯のきっかけとなったのは、2012年に実施された「モスプロジェクト」でした。この事業は、奥入瀬溪流エコツーリズムプロジェクト実行委員会(会長 十和田市観光協会会長)が青森県から受託し、企画立案と実施は、その後、任意団体として発足する奥入瀬自然観光資源研究会のメンバーが担当。景観美を楽しむ観光から自然本来の豊かさを楽しむ旅行へと転換する契機として、奥入瀬エリアを特徴付けるコケに着目したのです。

2014年2月に同研究会がNPO法人化され、同年8月には日本蘚苔類学会が星野リゾート奥入瀬溪流ホテルで第43回大会を開催。奥入瀬溪流を「日本の貴重なコケの森」と認定し、十和田市長に認定証も授与されました。

現在、奥入瀬溪流を迂回するバイパス整備も進められており、同研究会が目指す奥入瀬・十和田湖エリア全体を有機的な野外博物館と見立てる「奥入瀬ワールドミュージアム構想」は、バイパス完成後の観光基盤として期待されています。